

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

今、丁度、桜の真っ盛りであるが、この第 45 巻第 4 号の出る頃にはもう桜もすっかり葉桜となっているのだろう。昨年 3 月 11 日の未曾有の大災害から、早いもので、既に 1 年余の月日が流れた。東北諸県における災害の爪痕はなお深く、多くの方がいまだ家も職もないまま難渋の生活を送っておられることに深く思いをいたすものである。東日本大震災という名の地震・津波の天災とそれに引き続いた半ば人災ともいえる福島原発事故によって我が国は甚大な被害を受け、それからの完全な復興の目途はいまだに立っていない状況である。原発安全神話は根本から崩れ去り、近い将来に予想される東南海・南海地震などへの備えとともに、日本人の危機意識、人生観、価値観もこの 1 年間で急激な変遷を遂げているように感じる今日この頃である。それに加えて、深刻な雇用不安、経済危機や加速する少子高齢化などの問題もあり、大震災後の我が国の状況を壊滅状態から復興を目指した第二次世界大戦後になぞらえる人もいる。誠に同感である。

さて、そのような社会状況の中で、本号では、原著 1 編、症例報告 14 編の計 15 編の論文が掲載されている。原著論文は成人の膿瘍形成性虫垂炎に対する待機的腹腔鏡手術の有用性を報告したものだが、現在の縮小手術の流れの中で重要な論文であり、他の症例報告もいずれも興味深く価値ある論文ばかりである。ただ、急激に変革しつつある現在において学術誌のみこのようなアカデミズムの高みにのみ留まっていて良いのだろうかという疑問を感じるのは小生だけであろうか。災害時における消化器外科医の在り方、医療経済上の観点からの手術手技・ディスポーザブル器具の検討、深刻な外科医不足に対する方策など、社会的な見地からの論文投稿ももう少しあって良いようにも思う。

自他共に認める本邦最高の邦文学会誌としての学問的価値の継続はもちろんであるが、変革しつつある今後の消化器外科の中で、本誌の内容も少しずつ変わっていくことも必要なのではないだろうか。今後も、社会と共に発展・変革していく日本消化器外科学会雑誌であることを祈っている。

(富田 尚裕)

2012 年 4 月 1 日